

「アスピリン物語」

アスピリンは 1897 年ドイツバイエル社の Felix Hoffmann が発見した錠剤型では世界初の下熱・鎮痛薬で、恐らく世界で最も知名度が高く、今なお使用量（年間 1000 億錠）の最も多い薬物の一つとされている。それまでは柳の枝を噛むと歯痛が和らぐという伝承から、柳の樹液の成分であるサリチル酸が歯痛やリウマチの治療に用いられてきた。Felix Hoffmann は、彼の父がリウマチとサリチル酸の強い副作用で苦しんでいたことが動機となって研究を重ね、サリチル酸誘導体を合成、アスピリン（化学名：アセチルサリチル酸）を発見するに至った。

Aspirin の名は、Acetyl の A サリチル酸が柳の樹液に含まれる酸(Spirsaure)であったための Spir、そして化合物名によく用いられる語尾 in からなる合成語である。ちなみに、漢字では“阿斯必林”と書く。アスピリンより 30 年後に実用化されたアンチピリンやアミノピリンなどのピラゾール骨格をもつ、いわゆる“ピリン系下熱・鎮痛薬”にも“ピリン(pyrin)”という同じ発音の語尾が使われるが、構造的には全く異なり、アスピリンは“非ピリン系”の薬物である。

アスピリンの作用メカニズムについては本章でも述べるように、1971 年にイギリスの John Vane によって“痛みや熱に関与するプロスタグランジンという生体内生理活性物質の生成を抑制する”ことが明らかにされた。プロスタグランジン研究の進展とともにアスピリンの新しい効果、すなわち血小板凝集抑制（つまり、血液凝固の抑制 ⇔ 血栓溶解）作用が発見され、現在では血栓が原因で起こる心筋梗塞や脳梗塞の治療に必要な不可欠の薬物ともなっている。

・参考文献：Bayer 社発行「A History of the Miracle Drug ASPIRIN」

・*註：この文は拙書「有機薬品製造学」（さんえい出版）に記された挿話の一つである。